

| | | | |
|--------|--------------------------------------|--|-----------|
| 主題 | 見つけた！これだ！わたし達のリハビリ！ | | |
| 副題 | 「見える化」に取り組んで見えて来たもの ～機能訓練室を飛び出せ！～ | | |
| 多職種間連携 | | | 研究期間 12ヶ月 |

| | | | |
|-------------------|---------------------|--|--|
| 事業所 | 特別養護老人ホーム 多摩の里 けやき園 | | |
| 発表者：鈴木貴典（すずきたかのり） | アドバイザー：江井希樹（えいまれき） | | |
| 共同研究者：川口絵里 | | | |

| | | | |
|-----|--------------|--------|---------------------|
| 電話 | 042-460-8151 | E-mail | m-ei@enseikai.com |
| FAX | 042-460-8152 | URL | http://enseikai.com |

| | |
|------------------|---|
| 今回発表の事業所やサービスの紹介 | 平成17年に開設しました114名定員のユニット型特養です。全室個室でゆとりのある居住空間を提供しています。「その人らしさを大切に」の法人理念のもと、ご入居者が快適に過ごせるように自立支援を行っています。 |
|------------------|---|

《1. 研究前の状況と課題》

◎ご入居者の機能訓練室でのリハビリ風景を見た介護職員から「こんなに色々な事をご自分で出来るのか！」と驚かれる事があった。

◎この事が、ご入居者が機能訓練室で発揮できているADL状況をユニットでの生活に活かさきれていないのでは？という事に気が付く契機となった。

◎機能訓練室でのリハビリを「待つリハ」ととらえ、ご入居者にとって実際の生活環境であるユニットへ「出向リハ」に重点と発想を変える必要があった。

◎その為にはリハビリ職員がユニットにおいて介護職員と共にあらゆるケアを行う事で、視点や問題点を共有する必要があった。

◎＜機能訓練室から飛び出せ！＞を合言葉に、他職種間連携の強化に向かって、最初の一步を踏み出した。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

＜目標＞

- 全てのご入居者へより良い介護サービスの提供をする。
- 情報伝達の「見える化」に取り組み活用する。

＜成果＞

- 多職種間連携での役割分担をより明確にする。
- これが可能になれば、技術や経験による「差」を少なくすることが出来る。

《3. 具体的な取り組みの内容》

ポジショニングの情報を一目で見られるような形にした“ポジショニングポスター”を作り活用をした。

- ① 写真・図ではっきりと
写真や図を大きくし、印をつけて、はっきりと形を目視出来るようにした。
- ② 文字を変える
重要な部分に関しては色と大きさを変え、より強調されるようにした。
- ③ 文体
リハビリ用語や略語は使わないようにし、なるべく分かりやすい表現になるようにした。
- ④ 道具の指定
クッションを使用する場合は、形や大きさを明記するようにした。又、もしクッションが無かった場合に代用出来るもの・使い方を記載するようにした。
- ⑤ 見やすいところに
体位変換や移乗等を行う際に、目に入りやすい場所にポスターを掲示するようにした。
- ⑥ 更新
「他の部位であればどうすればいいのか?」「もっと見やすくしてみてもいいか?」等の意見や要望があった際には、内容を随時更新するようにした。

《4. 取り組みの結果と考察》

◎“ポジショニングポスター”による伝達方法を開始した当初は慣れない方法での介助に不安の声も聞かれた。

◎他職種間連携による協議や、意見交換をする中で出来てきた介助方法である事もあって徐々に浸透した。

◎積極的に実践していく職員が増えることで、今までやってきた介護方法とは違うが、実は介助量が減り、安全に行える方法があることが実感してもらえるようになってきた。

◎「見える化」された事で職員に理解されやすくなり、新しい技術や理論についても積極的に取り入れる職場風土に変化していった。

◎“ポジショニングポスター”をご覧になったご家族からは、職員間で連携して取り組んでいる事をご理解頂き、はっきり見えた事に対する評価も頂けた。

《5. まとめ、結論》

“ポジショニングポスター”を通して、「見える化」に取り組んだことで介護技術についての意見交換や技術伝達を行うきっかけになった。分かりやすく「見える化」に取り組むをする事で、あらゆる介護技術やケアの質の向上に繋がる職員間のコミュニケーションが生まれる結果となった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人・ご家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答を以って同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

大田仁史（2002年）『終末期リハビリテーション』 荘道社

《8. 提案と発信》

ターミナルケアを迎えるにあたって、ご入居者やご家族から様々な求めがリハビリにも出てくることもある。「出来ない」ではなく「どうしたら出来るのか」それに向かい多職種間連携を円滑にする努力が必要不可欠である。私達、専門職の能力を十分に発揮する事で、ご入居者の「その人らしさ」を保つ事は、最後の最後まで可能ではないか。

【メモ欄】